2023年産「アルプス米」てんたかく・てんこもり栽培こよみ（JA米）

アルプス農業協同組合
アルプス農協管内農業技術者協議会

てんたかく

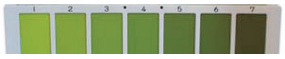
収量構成の目安（600kg／10a）

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数(本)	500	㎡当たり籾数(粒)	30,000	玄米千粒重(g)	23.5
一穂籾数(粒)	60	登熟歩合(%)	85		

4月 ／ 5月 ／ 6月 ／ 7月 ／ 8月 ／ 9月

ステージ：育苗期 ／ 5/6 田植え ／ 活着期 ／ 有効分げつ期 ／ 無効分げつ期 ／ 6/26 幼穂形成期 ／ 穂ばらみ期 ／ 7/18 登熟期 ／ 成熟期 8/23

作業日程の目安



葉色の推移（葉色カラースケール）：4.0を下回らない ／ 幼穂形成期 4.0～4.5 ／ 穂揃期 4.2～4.5

5/6 田植えの場合：浸種 3/31 → 播種 4/12 → 搬出 4/15 → 5/6 田植え → 除草剤散布 → 軽い田干し → 5/24～26 溝掘り → 5/31～6/5 中干し → 加里散布 → 6/27 穂肥① → 7/7 穂肥② → 7月上旬 一斉草刈り → 7/18 出穂期 → 防除① → 防除② → 8/16～18 落水 → 8/23 刈取り

品質向上は「土づくり」から
■土壌改良資材の施用基準

資材名	標準施用量(kg/10a)
粗状ケイカル	200
元気	100
シリカロマン	100
シンキューライトP	100

■秋耕しの実施
稲わらは秋のうちに5～10cm程度浅めにすき込む

管理のポイント

土づくり
- 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
- 土づくり資材や堆肥を施用する。

適正な乾燥調製
- 1.9㎜のふるい目を使用し、選別を徹底する。
- 水分14.5～15.0%に仕上げる。
- 胴割れ防止のため90%までに刈り終える。
- 籾の黄比率80%で刈り取り開始。

適期収穫
- フェーン時はあらかじめ入水する。
- 刈取り予定日の5～7日前まで間断かん水を行う。

収穫までの水管理
- 生育ステージに合わせて防除を実施する。

基本防除の徹底（2回必須）
- 2回目は傾穂期
- 1回目は穂揃期

出穂後20日間の湛水管理
- 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。

草刈りの徹底
- 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
- 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
- 1回目穂肥は幼穂長1～2㎜と葉色を確認してから施用する。

適正な穂肥

幼穂形成期から飽水管理
- 6/20頃に「エスアイ加里らくだ」または「珪酸加里」を施用する。

中干し後は幼穂形成期まで間断かん水
- 中干しは強すぎないように注意する。
- 田植後4週間までに開始する。

中干しは適期に開始
- 5m に1本を目安に溝を掘る。

溝掘りは確実に
- 活着後は、浅水管理をする。
- 植付深さは3㎝。
- 植付本数は株当たり3～4本。
- 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
- 苗箱施薬による防除を実施する。
- 基肥は基準量を守る。

田植え
- 搬出直後から換気の徹底。
- 田植時期に応じた計画的な育苗を行う。

健苗育成
- 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
- ゆっくりと耕起し、作土を15㎝以上確保する。

耕起・代かき
- 確実に施用する。
- 秋施用ができなかった場合は、土づくり資材を

適期の中干し開始・適度な中干し実施

○中干しは田植後４週間までに遅れず開始することで根の伸長を促進します。

○中干しの効果を高めるため、中干しの前には溝掘りを確実に実施しましょう。

中干しの有無による稲の姿　　乗用管理機での溝掘り

除草剤散布は遅れずに

雑草防除体系
●水深５㎝程度を保ち散布する。
●除草剤散布後7日間は落水やかけ流しをしない。

雑草の発生が少ない圃場：一発処理

- カチボシ・1キロ粒剤51・Lジャンボ　使用時期：移植時～12日（ノビエ2.5葉期まで）
- アピログロウMX・1キロ粒剤・ジャンボ　使用時期：移植後3～12日（ノビエ2.5葉期まで）
- エンペラー・1キロ粒剤・豆つぶ250　使用時期：1キロ粒剤　移植時～12日（ノビエ3.0葉期まで）／豆つぶ剤　移植直後～12日（ノビエ3.0葉期まで）

雑草の発生が多い圃場：体系処理

体系①：ノビエ対策
- マーシェット・1キロ粒剤　使用時期：移植後３～５日（ノビエ1.0葉期まで）
- ▼ カチボシ・1キロ粒剤51・Lジャンボ　使用時期：マーシェット散布後7～12日に使用（ノビエ2.5葉期まで）
- ▼ テッケン・1キロ粒剤・ジャンボ　使用時期：移植後15日～(収穫60日前まで)（ノビエ4.0葉期まで）中干し後に使用

体系②：ホタルイ対策
- ピラクロン・1キロ粒剤　使用時期：移植同時で使用（ノビエ1.0葉期まで）
- エンペラー・1キロ粒剤・豆つぶ250　使用時期：ピラクロン散布後14日以内（ノビエ2.5葉期まで）

体系③：中期剤
- ピラクロン・1キロ粒剤　使用時期：移植同時で使用（ノビエ1.0葉期まで）
- ▼ いずれか１剤
- ワイドショット・1キロ粒剤　使用時期：移植後15日～(収穫45日前まで)（ノビエ4.0葉期まで）
- サンバンチ・1キロ粒剤　使用時期：移植後15日～(収穫60日前まで)（ノビエ3.0葉期まで）

※赤文字の薬剤は令和５年度新規採用薬剤

雑草が残った場合

- ノビエが残った場合　クリンチャージャンボ　使用時期：1kg/10a施用　移植後7日～(収穫30日前まで)（ノビエ4.0葉期まで）
- トドメMF 1キロ粒剤　使用時期：移植後14日～(収穫50日前まで)（ノビエ5.0葉期まで）
- 広葉雑草が残った場合　バサグラン粒剤　使用時期：移植後15日～55日（収穫60日前まで）
- ノビエ・広葉雑草どちらにも効果有　トドメバスMF液剤　使用時期：移植後15日～(収穫50日前まで)（ノビエ6.0葉期まで）
- クサネムに効果あり　ロイヤント乳剤　使用時期：移植後20日～(収穫45日前まで)（ノビエ5.0葉期まで）

防除の徹底で被害を防止!!

○防除は適期に行い、防除間隔は７日間を目安とする（10 日以上あけない）。
○畦畔等のイネ科雑草の穂が出る前までに草刈りを行う。○麦あと等の不作付地は、大豆、園芸作物、緑肥等の栽培を行う。

病害虫防除体系

【育苗基本防除】・苗箱施薬剤は、**規定の薬量（50g/ 箱）を厳守**し、箱全体に均一に散布する。

薬剤名	散布量	使用時期	対象病害虫
ルーチンアドスピノ箱粒剤	50g/ 箱	播種時（覆土前）～移植当日	白葉枯病、もみ枯細菌病、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ、イネヒメハモグリバエ、イネツトムシ、フタオビコヤガ、コブノメイガ、ニカメイチュウ、いもち病
ブイゲットパディート粒剤	50g/ 箱	緑化期～移植当日	いもち病、白葉枯病、もみ枯細菌病、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、ニカメイチュウ、ツマグロヨコバイ、イネヒメハモグリバエ、フタオビコヤガ、コブノメイガ、イナゴ類
※紋枯病の常発地の場合 ブーンレパード箱粒剤	50g/ 箱	播種時（覆土前）～移植当日	いもち病、紋枯病、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、白葉枯病、もみ枯細菌病、ツマグロヨコバイ、フタオビコヤガ、ニカメイチュウ、イネツトムシ

※各薬剤とも、使用時期別に、上記以外の対象病害虫の登録があります。

【本田基本防除】・粉剤、液剤体系

防除時期	随時防除：紋枯病の発生が多い圃場	基本防除：穂揃期	基本防除：傾穂期
	てんたかく：出穂 14 日前頃 てんこもり：出穂 7 日前頃		
粉剤	バリダシン粉剤 DL 3～4kg/10a	ラブサイドキラップ粉剤 DL 4 kg /10a	スタークル粉剤 DL 3 kg /10a
液剤	バリダシン液剤 5 150 ℓ /10a　1,000 倍	ラブサイドフロアブル 150 ℓ /10a　1,000 倍 ＋ キラップフロアブル 150 ℓ /10a　1,000 倍	スタークル液剤 10 150 ℓ /10a　1,000 倍
対象病害虫	紋枯病	いもち病、カメムシ類、ウンカ類	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ等

土壌に応じた適正な施肥量

てんたかく　施肥基準（5/6植え）※側条施肥の場合

土壌区分	基肥一発体系：肥料名	基肥一発体系：施用量(kg/10a)	分施体系 基肥：肥料名	分施体系 基肥：施用量(kg/10a)	分施体系 穂肥：肥料名	分施体系 穂肥：施用量(kg/10a) 1回目	分施体系 穂肥：施用量(kg/10a) 2回目
砂壌土 壌土	LPs 早生専用	40	基肥206	40	追肥 3号	10	13
半湿田 黒ボク土	LPs 早生専用	35	基肥206	35	追肥 3号	10	12
粘質土	LPs 早生専用	30	基肥206	30	追肥 3号	10	10

てんこもり　施肥基準（5/8植え）※側条施肥の場合

土壌区分	基肥一発体系：肥料名	基肥一発体系：施用量(kg/10a)	分施体系 基肥：肥料名	分施体系 基肥：施用量(kg/10a)	分施体系 穂肥：肥料名	分施体系 穂肥：施用量(kg/10a) 1回目	分施体系 穂肥：施用量(kg/10a) 2回目
砂壌土 壌土	LPss 晩生専用	45	基肥206	45	追肥 3号	13	13
半湿田 黒ボク土	LPss 晩生専用	40	基肥206	40	追肥 3号	10	12
粘質土	LPss 晩生専用	35	基肥206	35	追肥 3号	10	10

●てんたかく・てんこもりは適正な生育量を確保するために、基肥は基準とする量を施用する。
●てんたかくは、基肥一発の場合、追加穂肥を原則施用しない。

積極的に利用しましょう！◎高品位・低コスト生産にカントリーエレベーターを

てんこもり

収量構成の目安（600kg／10a）

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数(本)	450	㎡当たり籾数(粒)	31,000	玄米千粒重(g)	22.5
一穂籾数(粒)	70	登熟歩合(%)	85		

4月 ／ 5月 ／ 6月 ／ 7月 ／ 8月 ／ 9月 ／ 10月

ステージ：育苗期 ／ 5/8 田植え ／ 活着期 ／ 有効分げつ期 ／ 無効分げつ期 ／ 7/12 幼穂形成期 ／ 穂ばらみ期 ／ 8/9 登熟期 ／ 成熟期 9/21

作業日程の目安

葉色の推移（葉色カラースケール）：4.0を下回らない ／ 幼穂形成期 4.0～4.5 ／ 穂揃期 4.2～4.5

5/8 田植えの場合：浸種 4/8 → 播種 4/19 → 搬出 4/22 → 5/8 田植え → 除草剤散布 → 軽い田干し → 5/29～31 溝掘り → 6/5～10 中干し → 加里散布 → 7月上旬 一斉草刈り → 7/15 穂肥① → 7/25 穂肥② → 随時防除 → 8/9 出穂期 → 防除① → 防除② → 9/14～16 落水 → 9/21 刈取り

品質向上は「土づくり」から
■土壌改良資材の施用基準

資材名	標準施用量(kg/10a)
粗状ケイカル	200
元気	100
シリカロマン	100
シンキューライトP	100

■秋耕しの実施
稲わらは秋のうちに5～10cm程度浅めにすき込む

管理のポイント

土づくり
- 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
- 土づくり資材や堆肥を施用する。

適正な乾燥調製
- 1.9㎜のふるい目を使用し、選別を徹底する。
- 水分14.5～15.0%に仕上げる。
- 籾黄化率85～90%程度で適期に刈り取る。

適期収穫
- フェーン時はあらかじめ入水する。
- 刈取り予定日の5～7日前まで間断かん水を行う。

収穫までの水管理
- 生育ステージに合わせて防除を実施する。

基本防除の徹底
- 2回目は傾穂期
- 1回目は穂揃期

出穂後20日間の湛水管理
- 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
- 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
- 1回目穂肥は幼穂長1～2㎜と葉色を確認してから施用する。

草刈りの徹底
- 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。

適正な穂肥

幼穂形成期から飽水管理
- 6/20頃に「エスアイ加里らくだ」または「珪酸加里」を施用する。

中干し後は幼穂形成期まで間断かん水
- 中干しは強すぎないように注意する。
- 田植後4週間までに開始する。

中干しは適期に開始
- 5m に1本を目安に溝を掘る。

溝掘りは確実に
- 活着後は、浅水管理をする。
- 植付深さは3㎝。
- 植付本数は株当たり3～4本。
- 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
- 苗箱施薬による防除を実施する。
- 基肥は基準量を守る。

田植え
- 搬出直後から換気の徹底。
- 田植時期に応じた計画的な育苗を行う。

健苗育成
- 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
- ゆっくりと耕起し、作土を15㎝以上確保する。

耕起・代かき
- 確実に施用する。
- 秋施用ができなかった場合は、土づくり資材を